

モーツァルト / 交響曲第 40 番 ト短調 K.550

W.A. モーツァルト (1756-1791) の交響曲創作を締めくくる「3 大交響曲」の 2 曲目にあたる「交響曲第 40 番」は、「パリ」や「プラハ」といったニックネームがあるわけでもないのに、「40 番」という番号だけで、あの哀愁を帯びた第 1 楽章冒頭のメロディを思わず口ずさんでしまう人も多いのではないだろうか。ため息のような 2 度下行音型で始まるこのト短調の交響曲は、堂々たる序奏のついた変ホ長調の第 39 番、明るく威厳に満ちたハ長調の第 41 番「ジュピター」の間で異彩を放っている。短調であること自体、モーツァルトの交響曲の中ではめずらしく (他は第 25 番のみ。やはりト短調)、それが音楽に暗い情動をもたらしている。「40 番」は他の 2 曲とともにウィーンで 1788 年夏に一気に作曲された。初演の記録は残っていないが、モーツァルトが初稿にはなかったクラリネットのパートをあとから加えたことから、初演を聴いてから改訂したものと考えられている。第 1 楽章 モルト・アレグロ、ト短調 さざ波のようなヴィオラと低弦に導かれ、ヴァイオリンが 4 拍目からのアウフタクト (弱拍からの開始) で哀しみの旋律を奏で始める。この主題が明るい変ロ長調の第 2 主題とともに展開される。第 2 楽章 アンダンテ、変ホ長調 穏やかで明るい緩徐楽章のようであり、ときおり孤独の深淵に沈み込むような瞬間が訪れる。第 3 楽章 メヌエット アレグレット、ト短調本来のメヌエットは優雅な舞曲だが、ここでは悲愴感があふれている。中間部のトリオでは、管の重奏が牧歌的な雰囲気醸し出す。第 4 楽章 フィナーレ アレグロ・アッサイ、ト短調終楽章も、激しい情熱に駆られて疾走する。第 1 楽章からの悲愴な感情がここでクライマックスに達する。

遠山菜緒美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。